

菊地浩さんが切望していた自叙伝の出版は没後26年の昨秋、ようやく実現した。タイトルは「ソ連人になった日本人の物語 霧のヴェールの彼方」。遠く離れた2人の遺族の尽力があった。

ウクライナ南部オデッサに住む菊地さんの娘エカテリーナさん(52)は、父が死の間際まで出版を夢見ながら「出版社につてがなく本にできなかった」ことがずっと気がかりだった。その思いを受け取ったのは菊

2国彷徨

ソ連人になった日本人の物語④



菊地さんが残した日記を広げて笑顔で思い出を語る娘のエカテリーナさん（渡辺玲男撮影）
左 菊地さんから送られた手紙を前に人柄を振り返るめいの東さん（水野薫撮影）

地さんの姉の娘、東京在住の東広子さん(66)だ。

東さんは、菊地さんが1975年に一時帰国した際に初めて会った。当時の旧ソ連では手に入りづらかったシーズを、娘のために買い込んでいた姿が印象に残る。

菊地さんはその後日本に来ることなく88年に亡くなったが、日本との縁は切れなかった。91年秋、「父が生まれた日本に行くのが夢だった」というエカテリーナさんが、オデッサの企業関係者の訪日に合わせて一緒に来たのだ。

いとこ同士、初対面。「言葉が分からなくて、互に見つめ合うだけでした」と東さん。それでも、ロシア語の辞書と首っ引きになってエカテリーナさんに手紙を送り、付き合いが始まった。東さんは2005年にはエカテリーナさんを訪ねてオデッサにも行った。

「熱意があるヒロコなら父の夢をかなえてくれるかも」。エカテリーナさんは、東さんがオデッサを再訪した10年、ファイルを託した。父の遺品の、日本語で書かれた自叙伝の原稿が入っていた。

東さんは「身近にこんな人生を送った人がいたなんて」と驚き、埋もれさせてはいけないと、手書き原稿を夫と2人でパソコンに入力し始めた。そのことが、戦争に関する記憶を呼び起こした。

遺志継ぐ2人親愛の一冊

東さんは敗戦4年後の東京に生まれた。東京大空襲を知る父や母からは、空から焼夷弾がパラパラと庭に降り、焼けただれた肌をあらわにした人が水を求めて隅田川に飛び込み命を落とした様子を聞かされた。

叔父の原稿には、旧ソ連の人々の温かい人柄に触れて、自身が人間らしさを取り戻していく過程も描かれていた。「戦争は悲劇ばかり強調されがち。でも、本当は友好や親愛を深めた人もいた」。東さんは本を出す意義を強く感じ、自費で出版することを決めた。

昨年10月、4年かかって本は完成した。東さんはウクライナを再び訪れ、叔父の墓前で出版を報告した。エカテリーナさんと、体調を崩している菊地さんの妻アガフィアさん(93)に、本を贈った。父の半生が謎だらけで、なぜ日本を出たのかも詳しく知らなかったエカテリーナさんは、心の霧が晴れるような思いを感じた。菊地さんが放浪を始めた原点、根室の図書館にも1冊贈った。

「ロシアは日本の隣の国なのに、今でも霧に包まれたような土地。でも、叔父にとっては日本もロシアも祖国であり、両国の友好を何より願っていた」。東さんはエカテリーナさんとまた会える日を楽しみにしている。

〓おわり〓
（モスクワ・渡辺玲男、根室・水野薫が担当しました）